

村落祭祀継続の要因に関する一考察 — なぜ神役であり続けるのか：宮古諸島西原の事例 —

平井芽阿里*

I はじめに

近年、南西諸島における村落祭祀は衰退化や形骸化が指摘され、2000年以降にあっては、消滅の危機を迎えている地域もある。これまで、村落祭祀の衰退過程を考察した研究は数多くあるといつてよい〔比嘉1987, 大越1986, 笠原1991, 安倍2000〕。中でも、村落祭祀の担い手となる神役が不足するといった問題は深刻であり、神役に就任しながらも村落祭祀に参加しない女性の存在も指摘されている〔森田1995:49, 上原2004:275〕。しかし、田中が指摘しているように、「すでに神役制が「崩壊し」ながらもなぜ祭祀が持続するのかという問い」に関する議論はこれまであまりなされてこなかったのではないだろうか〔田中2005:29〕。実際に、南西諸島の村落祭祀はその全てが突然消滅するわけではなく、宮古諸島の西原のように、さまざまな方法を試みることによって村落祭祀を存続させようとする地域間の対応がある〔平井2006〕。また、宮古諸島の池間島のように、一見消滅したかに見えても10年という時をかけ幾度も村落祭祀を復活させている地域もあるのである。

本稿では、宮古諸島の西原地域に着目する。西原でも神役不足の問題を抱えるなど村落祭祀の全てが順調に保持されているというわけではない。しかし神役への就任を拒否する女性が増加する中で、一度神役に就任した女性は、10年という任期を全うするケースが多いのである。もはや「崩壊過程」にあると見なされる村落祭祀において、現役の神役たちはなぜ今なお神役であり続けるのであろうか。

本稿では、村落祭祀継続の要因を導く試みの一環として、神役が神役としての任期を継続する要因について考察することを目的とする。まず西原の村落祭祀の現状について触れ、次に現役の神役2名とすでに卒業した神役2名の語りと経験を示し分析することで²、過渡期にある西原の村落祭祀にあって、神役が神役であり続ける要因を考察する³。

II 調査地概要—宮古諸島西原

沖縄県宮古諸島は宮古島と池間島、伊良部島、大神島などの8つの島々からなる。西原は図1に示したように市街地より北へ4kmほど進んだ地点に位置している。西原の人口は、表1に示したように、女性562人、男性559人、450世帯の計1121人となっている⁴。

*立命館大学大学院文学研究科博士後期課程

表1 西原の人口

字名	世帯数	男	女	計	1世帯当たりの人員数
西原	450	559	562	1,121	2.49

資料：宮古島市統計（2005年）

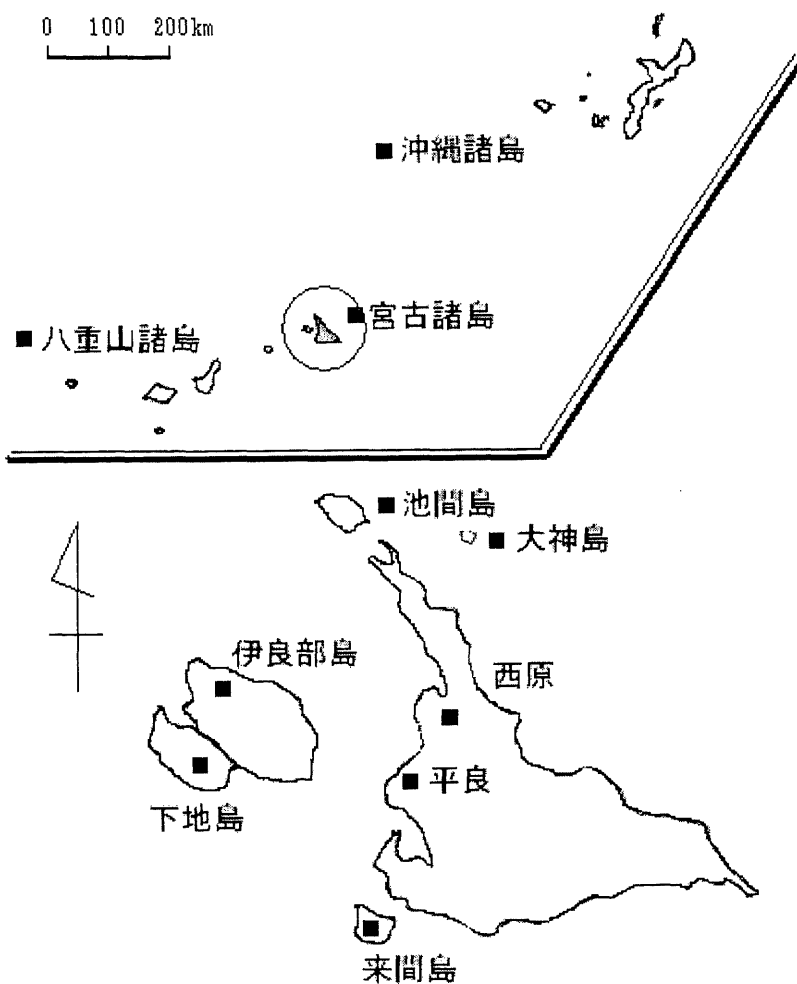


図1 宮古諸島所在地

西原は池間島から1874年に分村し、池間島最大の聖地であるウハルズ御嶽を引き継ぐと共に、ユークイやミヤークツツといった村落祭祀も継承した。西原には17カ所の御嶽が点在しており、中でもウハルズ御嶽を中心として、ヤマト御嶽、ナカマ御嶽、サイヌハ御嶽、ンマヌハ御嶽、ユキダキ御嶽、ウヅキ御嶽、アガイジャー御嶽、トゥクガーンミ御嶽、イーガマ御嶽の10カ所を中心に村落祭祀を執り行っている。

西原には、「ナナムイ」という祭祀組織があり、女性は数え46歳、男性は数え50歳になると入学することが本来義務づけられている。この「入学する」という表現は、西原ではナナムイを「ナナムイ学園」と捉え、加入を入学、退役を卒業、新たな加入者を新入生と捉えているためである⁵。ナナムイは女性と男性の集団に分かれ、それぞれの任期は女性満10年、男性満7年となっている。ナナムイには、日取り（ヒューイ）を決めることを専門とするヒューイトリヤの存在も含まれる。本稿では主に女性のナナムイに着目する。女性のナナムイは、「ハナヌンマ」グループとしてウーンマ、アグスンマ、ナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグスンマヌトゥムの5名と、「ナナムイヌンマ」グループとしてその他46歳から55歳までの女性たちで構成されている。ナナムイヌンマたちは、それぞれ1年生（新入生）から9年生（卒業生）まで学年ごとのグループに分かれており、入学後、1年ごとに進級する形をとる。男性のナナムイも同じく年齢階梯的に構成されているといえる。

西原では、ナナムイによる村落レベルの儀礼、つまり村落祭祀が年間40回以上執り行われている。村落祭祀は通常「カンニガイ」と称され、担い手となるのは主に女性である。女性のナナムイへの入学には、一定年齢に達することが条件としてある他、西原出身でなくとも、西原に嫁いでいる者なら可能となる。ハナヌンマに限っては、神クジというクジによる特別な選出儀礼が行われることから、古くから「神による召命」と考えられてきたといえる。ハナヌンマのうちのナカバイ、ウーンマヌトゥム、アグスンマヌトゥムは新しくナナムイ入りした女性たちから選出されるため、毎年最低でも3名の入学を見込まなければならない。ナナムイに入学した女性は、西原最大の村落祭祀であるユークイを境に神役に就任し、その後10年間に渡り村落祭祀の担い手としての務めを果たす。そしてユークイで卒業を迎えることとなる。

III 村落祭祀の現状（2001年～2006年）

1. 神役の拒否

南西諸島の村落祭祀が衰退化する中、宮古諸島の西原はどちらかといえば「脈々と伝統的な秘儀を継承し続ける」地域であると把握されてきた [山内2001:139-140]。しかし実際には、100年以上堅く護られてきたと伝承される村落祭祀の伝統的な側面は、1995年以降次第に崩れ始めているといえる。何より深刻な形で浮上したのは、2001年に起きた神役不足の問題である。先述したように、西原ではハナヌンマのうちの3名を新入生から選出するため、最低でも毎年3名以上の入学を必要とする。2000年に至るまでは毎年新入生を選出してきたものの、2001年には神役

の候補者である女性たちがナナムイへの入学を拒否したことによって、1名の入学しか得られなかった。2002年から2004年にかけては、候補者である女性がナナムイ入りしやすいように、村落祭祀をめぐる大々的な「改変」が行われた。しかし、2002年には2名、2003年には1名、そして2004年から2006年にかけては新入生が1名も入学しないという状態が続いている〔平井2006：29-30〕。

なお、表2は1997年から2006年までの10年間の入学者の推移を示した表である。

表2 入学者の推移

年 度	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
入学生の数	5	3	3	3	1
年 度	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年
入学生の数	2	1	0	0	0

上記の表から、1997年から2000年に至るまでは毎年3名以上の入学生を見込んでいるが、2001年以降は、正式な成員を欠いた状態で村落祭祀を遂行していることがわかる。

そもそも、「神役の拒否」という概念、あるいは「神役の拒否」という選択はいつ頃からあったのであろうか。そこで次に、候補者となった女性がなぜ神役を拒否するようになったのか、以前はどうだったのか、という点について述べる。

2. なぜ拒否するのか

2001年に至るまで、ナナムイへの入学は半ば強制的に、あるいは義務的に行われてきたといえる。本人の希望に関わらず、母は「ムラが必要としている時に出るのが人としての務めだ」と言い、「父が3期12年間市議としてムラの世話になった恩を、今返す時だ」とも言う〔赤嶺2001：99〕。もし候補者となる女性が村落祭祀への参加を拒否しようものなら、すでに神役を経験し終えた実母、義母、周囲の年配の女性たちが声を揃えてナナムイへの入学を促すのは自然な光景であった。彼女たちは「ナナムイへの入学＝地域への貢献」と考えるだけでなく、神役としての体験から、神々への儀礼を行うことの重要性を論じた。これは候補者の夫や実父、義父に関しても同様に言えることである。いずれにしても、ナナムイとは西原に住む者にとって必ず「果たさなければならない務め」であり、本来候補者となる女性に「拒否」という選択の余地はなかったといえる。そのため、病気や老幼の家族扶養、宗教的関与への違和感やナナムイ自体に興味を抱かない、という理由があろうとも、周囲の声に押されて入学せざるを得なくなることが多々あったといえる⁶。

しかしながら、1990年頃から、上述した理由に仕事や例えば沖縄本島在住であるといった居住地を加えることで、ナナムイに入学しない女性たちも存在している。それでもナナムイが継続してきたのは、同窓生で話し合いの場を持ち、「あんたが出れないなら私が出る」というように、

必ず3名以上は選出してきたことにもよる。西原では、同窓生としての相互補助といった繋がり
の深さが顕著である。ところが2001年にあつては、逆に同窓生全員で「拒否」を宣告するとい
う決断がなされてしまった。それは、この時やはり候補者となった女性たちが仕事を抱えてい
たこと、また車で通える範囲ではあるものの、西原在住でなかったためである。また、「こんな
時代になんでまだそんな原始的なことをやらなきゃいけないのか」という伝統行事に対する疑
念や神々に対する信仰そのものに関する価値観も影響している。さらに「神々を拝んだからと
いって生活の資金が手に入るわけではない」という、生活費への懸念もあった。ナナムイに入
学し神役に就任した女性は、日常生活の大半を村落祭祀に費やすため、仕事との両立が厳しい
状況となる。そして、ナナムイに入学する新入生は、村落祭祀で使用するさまざまな道具や衣
装を用意する必要がある。それだけでなく、新入生の入学は地域を挙げて盛大に祝うこともあ
り、招待費、着物の購入費など、準備資金として結果的に莫大な費用を要することとなるので
ある。これも神役への就任を拒否する要因の1つであったが、歴代の神役たちは、「ユーもいっば
い入ってくるから、生活にも困らない」と信じることによって納得してきた。この「ユー」と
いう言葉は、富、豊かさを示し[荒木1987:122]、また神々からの恵み、恩寵をも意味する。神
役になったからといって、仕事に相当する資金が手に入るわけではないものの、神々からの
「ユー」によって、生活には決して困ることはない、というのはすでにナナムイを経験した元神
役からしばしば聞かれることである。しかし、これは神役を経験した女性にとっては意味を持
つが、入学以前の女性たちにとっては、説得を促すほどの効果は現在はないと言ってよいので
はないだろうか。

また西原では、ナナムイに入学しなかったからといって、金銭的な代償の支払いが義務づけ
られているわけではなく、別のボランティア活動等を通して地域に貢献しなければならないわけ
でもない。つまり、ナナムイへの入学を拒否することによる、地域からの何らかの制裁は皆
無に等しいといえる。この場合、地域住民、特に元神役からの批判は無いわけではないが、ど
ちらかと言えば、「仕事もあるし仕方ない」と理解する者が多いのである。

このような理由に加え、2002年以降においては「先輩もやらなかったんだから、私もやらない」、
といったような、いわゆる拒否を可能とする背景が出来上がり、2006年現在はこの傾向がますます
濃厚となっている。

3. なぜ拒否しないのか

以上のように、2001年以降ナナムイへの入学者は激減している。さらに、前例が増加すること
によって、神役への就任拒否を容認する背景が次第に強化されているといえる。ところが、こ
のような状況下にあつてもなお、中には1人でナナムイに入学し、神役への就任を果たした候
補者もいる。彼女たちはなぜナナムイへの入学を拒否しなかったのであろうか。候補者となる
女性は、46歳という年齢において、その多くが家事や育児に追われるといった日常生活を同じよ
うな条件で営んでいる。つまり、ここで言わんとするのは、ナナムイへの入学を断る要素は、

今やどの候補者であっても存分にあるということである。それでもナナムイへの入学を承諾した女性達の心境とはいかなるものであろうか。ここではある神役の語りを提示することとする。

事例1：（2001年度入学生）

ユークイの3，4日前まで、絶対にナナムイになんか入らないと決めていた。昔から、母がブツダンに向かって神に願う姿を「くだらないことをしている」と思いながらどこかバカにしていた。母はいつもブツダンに向かって、「お金も上等に儲けさせて下さいねー」、「車に乗る時も、事故をしないようにキレイな道だけ通らせて下さいねー」と言って願っていた。ほんとにくだらんことだけやっている、と思って神のことなど信じたことはない。仕事もしているし、自分たちの代で、ナナムイに出るのはもうやめようって決めた。同窓生で集まって、全員でナナムイの入学を断ろうと相談して決めた。

でも、ユークイの前日に夜寝ていたら、夢を見た。夢の中で「はい、娘。あんたはどうしてもナナムイに出ないといかんから、ナナムイには必ず出なさいよ。1人でもいいからナナムイに入りなさい。あんたなんかのお母さんも神の人だから。あんたなんかも自分が神の人になるべきだから。ナナムイに必ず入りなさいねー。神の人になったら、ユーもいっぱい入ってくるから、生活にも困らないし、ナナムイに必ず出なさいよー」と言う声が聞こえた。翌朝、夢のことが気になって実家の母親を訪ね、「ウパルズの神様が来て、必ず出なさいよーと言っているから出るべきかねー？」と夢の内容を話すと、母は強制することもできないから、「もうそんなのは自分の気持ち次第。あんたが決めればいいさ」と言った。その時家の電話がなったから母が電話に出ると、市内に住む妹からだった。妹が慌てて、「あのね、自分が昨日の夕べ夢を見たらね、あのナカムニーのチャウヌヌの神様が夢に出てきて、あんたなんかのねえねえ（姉）³を絶対ナナムイに出せと言っていたよー！カンニガイをやらせるように言われた」と母に話した。母が「今ちょうどねえねえが実家に来ていて、ナナムイに入ることを迷っているみたい」と話すと、次女はすぐタクシーで西原にかけつけて来た。自分を見るなり次女は、「自分が10万お金あげるから、準備やれ。訪問着もお祝いの着物もこれで買って、揃えればいから、必ず出ないといけないよー」と言って、お店に連れて行かれ、準備をしてくれた。母も昔ナナムイの時に着ていた着物の裾を5寸ほど切ってミシンで縫い直して、5つも6つもみんな持たせた。結局、その日の午後からユークイにそのまま参加することになった。同窓は出ないと決めていたから、自分1人だけしか新入生は出なかった。

彼女は、当初ナナムイへの入学を拒否していた女性である。前述したように、2001年には同窓生全員がナナムイへの入学を拒否している。それにも関わらず、彼女は結果的に2001年にナナムイに入学し、神役に就任後、現在（2006年）に至るまでの5年間神役としてあり続けているのである。それは、彼女が夢という体験を通して神々と接触したと信じていることや、今まで神々やナナムイを馬鹿にしていたことを反省し、母のしていた行為を改めて深く理解していくよう

になったためである。

ここであえて触れておくと、1人だけでの入学というのは非常に心細いことでもある。先述したように、西原では同窓生の繋がりが深く、ナナムイ組織も年齢階梯的に構成されている。この場合、年齢が異なった成員の入学もあり得るが、ナナムイという組織の中で、「同学年」であるということは、非常に重要な意味をもつ。村落祭祀の場では学年ごとに座り、学年ごとに移動するだけでなく、学年ごとに謡う歌や踊りがあるなど行う役割も分担されている。そのため、1人での入学は、それら全てを1人で請け負うこととなる。つまり、ただでさえ多くの苦悩や葛藤を伴う神役という役目を、たった1人で行わなければならないという重責がのしかかり、相当な覚悟を必要とするのである。

次に、仕事のためナナムイへの入学を一度は断ったが、やがて入学を決意した女性の語りをみることにする。彼女は当初、夫婦2人での自営業という職業柄、平日に村落祭祀を行うことは不可能であった。また、他の同窓生もナナムイへの入学を拒否していたので、彼女も一度は断っている。しかし、神役への就任を拒否した場合には、何らかの不幸や病気に見舞われる、という地域間で語り継がれる伝承が気がかりであった。しかも、それらの災厄は命を落とすこともあると言われ、候補者本人というより、子供や両親という身内にも及ぶと信じられている。そのため、彼女は地域と相談し、村落祭祀の日程の「改変」を条件にナナムイへの入学を承諾する。しかしながら、村落祭祀をめぐる「改変」は大きな波紋を呼び、「改変」のきっかけを作ってしまった彼女は「正式な日取りでやらないカンニガイは意味がない」という批判をぶつけられることとなる。つまり彼女は、1人だけでの入学を果たしただけでなく、村落祭祀の「改変」に対する地域の批判をも受けることになる。また、月曜日から金曜日にかけて朝から夜まで働き、土日は村落祭祀に費やすなどほぼ休みのない日々を1年以上の間過ごすことになる。それでも彼女が神役としてあり続けるのは、いかなる理由によるものであろうか。

事例2 (2003年度入学生)

ユーキも、前だったら準備は何日もかけてやったけど、今はなるべく日にちを短縮しようとしている。お弁当も用意したりできなくなってる。お祝い周りの時も、前はいない人のところは代理で踊っていた。でも今年はやめて、歌だけ謡うことにした。ウタキだけでなく外でもそうして、見ている人に今の現状を伝えて、理解してもらおうとしている。部落⁹のヒトに本当に真剣にナナムイの今後を考えてもらわないと困るし、現状を感じて欲しい。ウタキで「ムムダイガマイ、センダイガマイ、カギナナムイユドウツウガシヨウダヨ (百代までも、千代までも、美しいナナムイを世継いでいこう)」と謡っているけど、謡いながら泣いている。私たちは無事にインギョー (卒業) できるのかねーという不安があるから、ナナムイの現状を一番ひしひし感じている。

今年ミージャウズ (先輩) が卒業して、来年また卒業したら、残りはほんの少しになってしまう。でも、ひとりふたり入学したとしても、それはそれでまた同じことを繰り返すこと

になる。本当に部落のヒトに考えてほしい。フヤグミター（神様たち）には、フミーブタ（新入生）が出てくるように、お願いします、といつも願ってる。それでもユークイが来るまではどうなるかわからない。ナナムイはこの1、2年で大きく変わってしまった。フヤグミ（神様）は、マビイトウン（人間）がやらないでいるよりは、形を変えてでもやっている方が良くと受け取ってくれていると思う。どんどん形が変わって行って、現代風になってきているけど、それがたぶん西原のナナムイの形だと思う。

神役に就任してからの3年間、彼女にとってのナナムイは、決して「楽しいもの」ではなかったはずである。しかしながら、以上の語りから伺えるのは、一度はナナムイへの入学を拒否しながらも、現在ではナナムイの存続を懸念し、地域の人々にもナナムイの危機的状況を伝達することに力を注いでいるということである。また、多くの波紋を呼んだ村落祭祀の「改変」をも肯定的に受け止め、現役の神役として、10年という任期を全うし、無事卒業することを切望していることがわかる。

4. なぜ神役としてあり続けるのか

以上のように、ここではナナムイへの入学を一度は拒否しながらも、神役へ就任し、結果的に神役という役割を継続している女性2人に注目した。しかし両者には、今後10年という任期を果たせずに、中途退学をしてしまうという可能性が全くないわけではない。そこで次に、ナナムイへの入学を一端躊躇しながらも、すでにナナムイを卒業した2人の女性に着目することとする。この際、なぜ彼女たちが10年間神役であり続けたのか、ナナムイに入学する以前と入学後では神役にいかなる変化が生じるのか、という点に特に留意する。

事例3（1992年度入学生）

ナナムイに入らないと、ナカマウタキにどんな神様がいるかもわからないし、私たちが神様に護られていることは、ウタキに入らないとわからない。例えばミャークツツがなんで大切か、マスムイがどんな儀式か、とか、新生児が生まれたから、孫が生まれたからマスムイをやる、とかじゃなくて、なんでマスムイをするのか、といったことは、ウタキに入らないと分からない。マスムイっていうのは、神様にちゃんと子供が生まれましたよーと報告すること。そしたらそれが『神の帳簿』にもちゃんと載るってこと。自分はナカマウタキにどんな神がいるかもわからなくて、小さい時はただ通りすがっていた。でもナナムイに入るとどんな神様がいるのか学んだら、神歌の歌詞もだんだん理解できてくる。これは10年かからないとわからないこと。

また、色んなお祝いの席でも踊るグディンブーやヨツダキ、モーヤーなんかの特別な歌や踊りは、ナナムイに入らない人には踊れないし、歌も謡えない。ナナムイに入らない人でも、何回かお祝いを経験するうちには分かるようになるかもしれないけど、ちゃんとした手順は

習えない。だからこの踊りを踊れるだけでも、大きな有り難みを感じれる。

どこの家庭でもある程度、家のニガイ（ヤシキダミ）とか交通安全（クルマニガイ）とか子供達の試験の時とか、個人的でもカンニガイはしている。でも、それは一時的な心のより所で、ナナムイほどの安心感はないと思う。決して永続的なものではない。自分たちが入学した時に、「ナナムイはあと10年持つかなー」と思った。インギョー（卒業）してからは、だんだん形が崩れていってる。地域の中には、ナナムイなんて関係ない、という人もいるし。過渡期を迎えていて、今後どうなっていくのかは誰にもわからない。自分の場合は、そろそろ出るべきかなー、と該当年齢の2年くらい前から同窓で集まって話したりはした。本気には考えていなかったけど、なんとなく、やがて入るのかねーという意識は少しずつ芽生えていた。突然決まったナナムイ入りで腹も立ったけど、自分の時は、「大変、100年も続いていたものを途絶えさせたら大変！」という母親の言葉が大きかった。でも今の親は、娘に無理強いすることもできないでいる。嫁には言いにくいし、娘でも仕事しているからダメだろうと思う親が多くなってきている。今は親の発言力も弱っていて、ナナムイを継続させたいとい



写真1 厳かな雰囲気ですカズキを交わす

う思いと、娘に苦勞させたくないとする思いに揺れているみたい。

ナナムイの10年は、だれもがみんなちょうど子育てまっただ中。それを乗り越えて、がんばったという思いがある。インギョーが近づくと親は年老いてゆくし、子供は成長した、嫁ももらった、孫もできたという、移り変わる時でもある。女性から母親になり、そしてオーバーにもなる。色んな形で変わっていく10年よね。中には旦那が亡くなった人もいるし、お母さんがなくなった人もいるし。

今晚ニガイがあるとして、もうあと2、3日後に試験が控えている時には、おばあたちに「ナカバイのね、次男坊があさって試験を受けるってさ、みんなでニガイをしよう」と言ったら、おばあちが、さーっと集まって「じゃあもうみんなニガおうねー」というのが何ともいえない。バスケットの試合があったら、ケガがないように、と神様にみんなニガウ、パワー、そういう時って思いは一つなんじゃないかな。また合格したら、「みんなのおかげだよー、ありがとー」とお祝いを持ってきて、ナナムイというのはそういう所だよ。教員試験の時には子供の名前を書いて、受験番号も書いて、ウタキでみんなでお祈りをしようとなる。合格できたらまたお祝いに来る。じゃあいい先生になるためにまたガンジウサイチバン！と願いを重ねる。それがナナムイのいい所。オーバーの旦那が体調崩しているからカンニガイを休んでいる時には、神様にみんなニガイをする。元気になってきたら、「みんなのお陰で元気になったよーありがとー」とそのオーバーが言ってくる。それがナナムイのいいところ。いいことも悪いことも全て皆で分け合う。

ナナムイに入ることを断った人たちは、平気な顔をしている反面、どこかで負い目を感じているかもしれない。本人の心は揺れたと思う。でも、「先輩もでなかったし、何で私だけが」と、どんどんそうなってくると思う。神様を信じてないんじゃない。何かあったら神様にはニガウけど、周りから色々なことを聞いて、めんどくさいという人が増えているみたい。

彼女は入学当時、該当年齢から2歳も下の44歳であったのにも関わらず、急遽連行される形でナナムイ入りさせられ、その後10年という任期を務め上げた。結果的にナナムイでの体験を通し、踊りや歌といった技術的側面だけでなく、安心感といった心情的側面での充足感を感じていることがわかる。実は、ナナムイを「ナナムイ学園」にしよう、と提案したのは彼女である。それはナナムイに入学することで神役に就任するだけでなく、神々や先輩に対する礼儀作法、言葉遣い、歌や踊りに儀礼の手順等、さまざまなことを学ぶためである。またナナムイに入学した女性にとって、神々に対して神役全員が揃って祈願することは、神役だけでなく、家族や親戚にも精神的な安定を与えている。ここに示したのは一例であるが、ナナムイを経験したほとんどの女性たちが、想いが一つに重なり合う時の素晴らしさは、とても言葉で表現出来るものではないと話す。その喜びを感じるからこそが「ナナムイ学園」に入学することの意義でもあるという。引き続き、すでに卒業した女性の語りを示すこととする。

事例4（1994年度入学生）

1年生の時はきつくてきつくて、やめたいなーと思ったこともあったよー。母親（義母）の介護もあって大変だった。子供も5名もいたし。それでもウタキに入ったらお菓子もジュースも準備してあって、ねえねえたちも優しくしてくれるもんだから、家のこともなにーも考えんと時間も忘れることができるから。楽しかったよー。家のことも子供のことも、ちゃんと神様にニガっているから何も心配ないし、何も気にしなくていいから、解放された気分にもなって、夜までおしゃべりしたり、フルーツを食べたり、みんなでほんとに楽しく過ごせるよ。ウタキにいったら、不思議とぐっすり眠れるもんだから。だからいつもウタキに行く時にはワクワクして、楽しみだった。卒業の前には色々ともめて、ウタキ行きたくないなーと思うときもあったけど、でもやっぱり楽しい気持ちの方が多いさ。50（歳）過ぎたらカンニガイは身体に負担もあって、思いカバンを持ってウタキを回るのはきついから、若い時にしかできないことなんだねーとわかった。でも今はウタキに行かなくなって寂しい。

ここで留意すべきことは、入学した時には「きつくてきつくて」辞めたいとさえ思ったナナムイを、次第に「楽しい」と捉え、ナナムイを卒業し、御嶽に行かなくなったことを「寂しい」と表現していることである。これもすでにナナムイを卒業した女性たちの多くから聞かれる発言である。彼女が卒業する2004年には、村落祭祀の「改変」をめぐる、さまざまなトラブルが生



写真2 おどけて見せるナナムイヌン

じたため、神役たちが涙を流す光景を見ることもあった。それでも、どちらかといえば、御嶽とは厳かな空気感を持つ一方で、女同士の持つ独特の雰囲気があり¹⁰、常に笑い声の絶えない場でもあるのである。

このように、ナナムイに入学することを一度は躊躇した女性であっても、そうでなくとも、入学後はほとんどの女性が10年にわたり神役としての役目を勤め上げる¹¹。それは、「ナナムイに一端入ったら、卒業するまで辞めてはいけない」という禁忌にもよるが、ナナムイへの入学を断る女性たちが増加する中であって、その言葉だけでは全てを語ることはできないのではないだろうか。そこで次に神役が神役であり続ける要因について考察する。



写真3 時折御嶽に響く笑い声

IV 考察

1. 拒否の要因

以上見てきたように、本稿では、西原の神役不足という村落祭祀の現状について触れ、次に現役の神役2名とすでに卒業した神役2名の語りと経験を示した。ここでまず考察すべきは、

神役がいつ頃から拒否を行い、またなぜ神役を拒否するのか、という点である

2001年以降、西原では神役不足の問題に直面しているが、かつて神役への就任は西原に住む女性たちの義務であった。もし神役を拒否しようものなら、親や親戚、地域が黙っておらず、いかなる理由があっても、たとえ強制的になろうとも、候補者の女性は神役への就任を果たした。つまり、「神役への就任を拒否する」という選択肢はほとんど存在していなかったといえる。

しかし、現在西原の女性は神役への就任を拒否する傾向にある。それは、まず子育て真っ最中であること、仕事と神役の両立が困難であること、神役に就任する際に経費がかさむといった経済的な側面を挙げることができる。といっても、神役候補者となる女性が子育て期にあることや仕事を抱えているのは、分村以後から同様であるといえる。無論、職種は畑仕事から事務職へ移行するなど異なってはいるものの、著しく変化したのは、大学進学者が増加したという進学率である。宮古島には大学がないことから、沖縄本島、あるいは県外の大学への進学者が増え、現金収入が必要となった。そのため、「ユーもいっぱい入ってくるから、生活にも困らない」といった伝承は何ら効果を発せず、また神々への信仰に対する価値観も多様化しつつある。さらに神役への就任を拒否したことによる地域からの制裁がないこと、他に就任を拒否した女性が増加していることなど、地域が神役就任の拒否を容認しているのも大きな要因としてあげることができる。つまり、現在では「神役への就任」が候補者の女性たちにとって非常に軽い選択となってしまったことが、神役拒否の要因の1つであるといえる。

2. 拒否しない要因

次に、神役への就任を拒否する女性が増加する中で、一度神役に就任した女性が、なぜ神役として有り続けるのか、本稿では一度神役への就任を断りながらも、現時点で神役としてあり続けている2名の女性（事例1、2）の語りを見てきた。

事例1に挙げた女性の語りの中で注目すべき点は、「神のことなど信じたことはない」彼女が夢を見るという体験によってナナムイへの入学を決めていることである¹²。ここで留意しなければならないのは、彼女が夢の中で聞こえた声を「ウパルズの神様」と捉えている点はないだろうか。夢の中の声は、自ら神と名乗っているわけでも、ウパルズの神であると言ったわけでもない。しかし彼女は夢の中の声を神の声であると認識し、「絶対にナナムイになんか入らない」という意志が揺らぐこととなった。さらに妹の体験によって自らの認識を確信へと深め、結果的にナナムイへの入学を決断した。

それまで、神々を信仰しない自分という存在に対して、妹や母親は神々に対する信仰が厚い存在であった。さらに西原では年間40回以上ある村落祭祀を担う神役を偶然集落内で見かける機会は多く、ユークイでは家族が担う役割もあり、また小中学校で生徒たちが同席する村落祭祀もある。そのため、西原で生まれ育った者であれば、そのほとんどが祈りの場に立ち合うという体験を一度か二度はするといつてよい。それは直接的ではないにしても、間接的に影響を及ぼし、彼女自身も気づかないひとつの習慣として神々への認識が根付いていたことを示してい

る。それらが神々に対する畏怖や恐怖感となって彼女に「神の声」を認識させたのではないだろうか。

事例2に挙げた女性もまた、神々への畏怖から神役への就任を承諾している。これは、神役への就任を拒否した場合には、本人だけではなく、その身内にも災厄が生じるという伝承にもよる。しかし、他の候補者はこのような伝承を知りながらも、神役への就任を断っている。つまり、事例1と事例2の女性たちが感じる神々に対する畏怖や恐怖、禁忌に対する懸念は、あくまで入学のきっかけとしてあり、その後神役としての役目を継続するのは、この2つの理由のみではないのではないだろうか。事例2の女性の語りからも明らかになるように、新入生が入学するように神々に祈りながらも、「どうなるかわからない」と述べているのは、神々への祈りが必ずしも絶対的な確信となっているわけではない、ということである。また本来決して「改変」の許されない神前での行為に「改変」を加えたことに対しても、神々は「やらないでいるよりは、形を変えてでもやっている方が良いと受け取ってくれていると思う」と肯定的に解釈しようとしている。つまり彼女は、入学当初は神々に対する強烈な畏怖を感じていながらも、現在では神々はわりと気まぐれで、わりと寛大な存在であると理解しているといえる。絶対的な存在としての神々に服従する形で神役としての役目を継続しているというよりは、現役の神役として、卒業するまでナナムイが存続することを願い、ナナムイの現状を周囲に伝えることの必要性を訴えているのである。

3. 神役であり続ける要因

新入生の入学が見込めず、正式な成員を欠くという不安定な状態が続き、「改変」後の村落祭祀は本来の村落祭祀とは異なるという地域からの批判がありながら、西原では一度神役に就任した女性がナナムイを退役することはほとんどない。それは本稿で提示した3名の女性（事例1, 2, 3）のように、望まない形での入学を遂げた女性たちであっても同様にいえることである。それでは、西原における神役たちはなぜ今なお神役としてあり続けるのであろうか。

事例3で挙げた神役の語りから明らかになるのは、ナナムイにおいて神役が何を受け継ぐのか、といった事柄である。ナナムイで学ぶ事は、神々の種類、神名、御嶽や村落祭祀の種類と名称に関する項目や、儀礼の手順、線香の数え方、祈り方、神歌、踊りに関する事項、そして村落祭祀の意義、意味、さらに神々に守護されている、という体験である。受け継ぐ方法としては、先輩による継承、あるいは個人的体験などがある。この女性の語りとして特徴的なのは、ナナムイを「女性から母親になり、そしてオーバーにもなる。色々な形で変わっていく10年」である、と捉えていることである。確かに、神役としての46歳から55歳という年齢は、ライフサイクルの観点からすれば、「中年期」に当たる¹³。中年期は、子供の巣立ち、両親の老いや死に直面するだけでなく、身体的にも社会的、心理的にも変化の多い時期である〔岡本1999:74, 2002:177〕。ナナムイを通して受け継ぐのは、神々に関する知識の授受といった視覚的に把握できる部分だけではなく、変化の時期にあって、「いいことも悪いことも」共に体験することである。そ

して何より、集落としての祈願、個人的な祈願としての「祈りの共有」という点が神役に大きな意義を与えている。この「祈りの共有」は、「超自然に対する人間の働きかけという本質的な意義のほか、人々の心を一つに集中させるということによって、集団の連帯意識の高揚という機能」が明確に表れているといえる [比嘉1987:113]。それは、事例4に挙げた女性の語りにも集約されているのではないだろうか。

以上のように、ナナムイとは儀礼的な側面の継承だけでなく、人生における変化の時期を共に体験し、祈りを共有するといった連帯性のある永続的な存在であるといえる。過渡期にあって神役がなお神役であり続けるのは、神役を中途退役することによって引き起こされる神々への畏怖だけではない。「ムムダイガミマイ、センダイガミマイ、カギナナムイユドウユツウガシヨウダヨ（百代までも、千代までも、美しいナナムイを世継いでいこう）」という神歌に涙するのは、彼女たちがナナムイを単に儀礼的行為の連続として捉えているわけではなく、祈りや体験の共有といった連帯として捉えているためである。

しかし、候補者となる女性たちに伝達されるのは、このようなナナムイの連帯性ではなく、村落祭祀の「改変」をめぐる地域間の批判的な意見である、というのが現状である。従来御嶽の中で行われるさまざまな儀礼は秘儀とされ、将来の候補者となる娘、あるいは嫁にその詳細が語られることは少ない。また家族の側にも、御嶽でのことは触れてはならないという暗黙の了解がある。その結果、母継ぎ、娘継ぎがうまくなされていないことも衰退化の一つの要因としてあることを指摘しておく。このような伝達のせき止めは、親子、家族間の伝承機能が廃れて来ていることを意味するとともに、村落共同体としての繋がりも薄れていることを示唆して



写真4 卒業の際には皆に胴上げされる

いるのではないだろうか。

ところで、西原では、卒業を控えた神役だけが踊ることのできる踊りがある。彼女たちは、「イミバニ ウイタン（短い羽が生えた）、ウダバニ ウイタン（太い羽が生えた）」と謡いながら踊ることで、ユークイが近づくとあまりの嬉しさに羽が生え、最初は小さかった羽がやがて大きくなり、大空高く舞い上がるといわれている〔赤嶺2001：117〕。長年西原を研究してきた上原は、幼鳥から成長し続け、ついには成鳥となる所作を演ずるこの行為を西原の特異性であると述べている。さらに西原の神役が鳥になったのは「神になった証」であり、10年間ナナムイを務めた結果がそうさせたとしている〔上原2001：121〕。村落祭祀において継承するのは、単に儀礼的側面だけではなく、体験、祈りの共有、連帯性が重層的に存在している。だからこそ神役たちはなお神役としてあり続け、10年という任期を全うするのである。

V おわりに

以上見てきたように、西原において神役への就任を拒否するという選択は、地域共同体としての繋がりの衰退をも意味していることがわかった。そのため、現時点では西原の村落祭祀は「崩壊過程」にあると言わざるを得ない状況にある。しかし、それは決して固定的なものではないといってよいのではないだろうか。つまり、西原では特定の血筋による継承方法をとる訳ではなく、3名の女性が揃えば村落祭祀の遂行が可能である。現時点では村落祭祀の手順に関する記録は多々残っており、元神役経験者たちも何百人と存在している。また該当年齢や居住地、出身地に関しても西原の場合、わりと柔軟に対応しているともいえる。そのため、今後新入生が入学すれば、村落祭祀はまた「本来」の姿へと回帰しようとするかもしれないし、あるいは、現在の形、また「改変」を重ねた形が「正式」な村落祭祀と認識されるようになるかもしれないのである。いずれにしても、これらについては今後も考察を進めるつもりである。

最後に、村落祭祀の衰退化の問題に言及するにあたり、いわゆるノロを中心とした国家的祭祀を引き継ぐ村落と、西原のように西原在住であれば原則的に神役への就任が可能であるといった形態をとる村落とを同一視してよいのか、という疑問がある。国家的祭祀であっても、村落祭祀であっても、神々という信仰の対象は同じであるかもしれないが、形式、形態は少なからず差があるといってよいであろう。そのため、一口に衰退化といっても、国家的祭祀の終焉はもはや琉球王朝時代に始まっていたともいえるため、今後はこのような点についても考察を深めていくことを課題としたい。

註

- 1 小浜島の年中行事の継続要因を生涯教育システムという観点から捉えた論考などがある〔加賀谷2005〕。
- 2 本稿で示す神役の語りは、聞き取り調査の一部をまとめたものである。神役の使用する用

語についてはそのまま載せている。

- 3 本稿は2004年2月～11月にかけて行った長期的な調査と2006年9月～10月に行った調査に基づいている。
- 4 2005年1月現在。宮古島市統計を参照。
- 5 本稿では神役の認識に従う。
- 6 いわゆる外来宗教集団への加入者は基本的にナナムイへの入学，ナナムイで行う村落祭祀への参加は行わない。どちらかというとなナムイを蔑視する傾向にある。
- 7 ここで言うブツダンとは，いわゆる本土式の仏壇を指すのではない。ブツダンには先祖代々の位牌を祀っている。上段中央に位牌，左右に花活け，中断にさかずきと茶碗，下段に香炉を置くという形式を取ることが多い [高橋2002:74]。
- 8 「お姉さん」という意味である。
- 9 宮古諸島ではしばしば集落を示す時に「部落」という言葉を用いる。そのため，本稿では語り手の女性の認識に従い，この言葉を使用している。
- 10 例えるなら女子校のような雰囲気である。
- 11 沖縄本島への移住などで任期中に参加できなくなった神役もいるが，ユークイには参加するなど神役を退役したわけではない。
- 12 神々の夢を見る，などといった体験をするのは，彼女に限ったことではない。またそれまで神々について考えたことのない女性たちが，ナナムイに入ることによってこのような体験をすることは往々にしてある。
- 13 ここでは「ほぼ30代後半から，老年期への移行期の始まりと考えられる50代後半まで」を中年期とする [岡本2002:176]。

参考文献

- 赤嶺和子 2001「ナナムイ賛歌—ナナムイヌンマ10年の記憶—」比嘉豊光『光るナナムイの神々 沖縄・宮古島～西原～ 1997～2001』風土社
- 安倍宰 2000「沖縄県伊良部島・佐良浜の祭祀組織—社会構造の視点から—」『國學院大學紀要』38 國學院大學
- 荒木博之 1987「民俗と祭祀—ユークイの思想—」福田晃，湧上元雄 [編]『琉球文化と祭祀』ひるぎ社
- 上原孝三 2001「神はどこへ」川上哲也 [編]『西原村立て125周年記念 んすむら』
- 上原孝三 2004「宮古島の祭祀歌謡からみた女神」野村伸一 [編]『東アジアの女神信仰と女性生活』慶応義塾大学出版
- 大越公平 1986「村落祭祀の変容とその要因」『国立民族学博物館研究報告別冊』3 国立民族博物館
- 岡本佑子 [編] 1999『女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での

成熟一』北大路書房

岡本佑子, 松下美知子 [編] 2002『新 女性のためのライフサイクル心理学』福村出版

加賀谷真梨 2005「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』
242 日本民俗学会

笠原政治 1991「神役制の崩壊した村—伊平屋島・我喜屋の調査から」『南島史学』37 南島史
学会

笠原政治 2001「あのノロが健在だった頃—沖縄渡名喜島事録1982-1987」『民俗文化研究』2 民
俗文化研究所

高橋恵子 2002『沖縄の御願ことば辞典』ボーダーインク

田中正隆 2005「地域社会における祭祀の持続と変化をめぐる一考察—トカラ列島の事例から—」
『日本民俗学』242 日本民俗学会

比嘉政夫 1987『女性優位と男系原理—沖縄の民俗社会構造』凱風社

平井芽阿里 2006「村落祭祀の変容と伝承—宮古諸島西原を事例として—」『地域文化論叢』8
沖縄国際大学大学院

森田真也 1995「神役と擬似的神役—その正統性をめぐって—」『南島史学』45 南島史学会

山内健治 2001「波照間島の神々と農耕変化について」『政経論叢』69-4.5.6 明治大学政治経済
研究所

謝辞

本稿の執筆にあたり、かねてからご指導していただいた多くの先生方に心より感謝申し上げます。また、長年の調査を許して下さり温かいまなざしで協力して下さる西原の御嶽の神々と西原地域の皆様、そしてまるで家族の一員のように寝食を共にすることを許して下さっている寄川家の皆様に心より感謝申し上げます。これら全ての誠意の総和によって研究が成り立っていることを感謝するとともに、まだまだ至らない点に関しては、今後ともご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。